日本赤十字九州国際看護大学/Japanese Red Cross Kyushu International College of Nursing

学びの醸成と看護実践力育成を目指した「学長杯」の実施：看護大学における新たな正課外教育の可能性の検討

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 日本赤十字九州国際看護大学 公開日: 2023-03-31 キーワード (Ja): 学長杯, 看護大学, 正課外教育, 看護実践力 キーワード (En): President’s cup, nursing college, extracurricular education, nursing skill 作成者: 山本, 孝治, 苑田, 裕樹, 木村, 涼平, 福島, 綾子, 小松, 浩子 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.15019/00000846

実践報告

学びの醸成と看護実践力育成を目指した「学長杯」の実施
看護大学における新たな正課外教育の可能性の検討

山本　孝治[1)]　苑田　裕樹[2)]　木村　涼平[1)]　福島　綾子[1)]　小松　浩子[1)]

新型コロナウィルス感染症による感染対策に伴う行動制限があるなか、学生間の交流を深め、学びの醸成と看護実践力の育成を目指し、正課外教育の一環として2022年３月に「学長杯」を実施した。本稿では、「学長杯」の実施と課題、今後の展望について報告し、看護大学における新たな正課外教育の可能性について検討する。感染対策の観点から「学長杯」はオンラインで行うこととし、総合的な看護の実践力を求める７つのミッションを準備した。参加した学生は１年生～３年生で、チーム対抗でミッションに取り組むように構成した。参加した学生は、事前に提示した準備学習を活用しながら、チームで協働してミッションの解決に向け取り組んだ。学生は複数のミッションに取り組み、看護実践力に必要となる対象者の特性に応じたコミュニケーションや状況を的確に捉え、判断し柔軟に対応する力を発揮した。今後も「学長杯」を継続し、正課外教育としての効果について評価し、正課内教育を連動させ看護実践力育成やキャリア形成を目指した教育システムの構築を検討する。また、対面による「学長杯」の実施、実習施設の看護師の参画や赤十字の組織力を生かした企画の検討も必要である。

キーワード：学長杯、看護大学、正課外教育、看護実践力

Ⅰ　はじめに

2020年に始まった新型コロナウィルス感染症（COVID-19）の拡大は未だ収束の目途は立っておらず、感染症拡大に伴う影響は社会生活全般に大きな影響をもたらしている。本学では、政府・行政の感染対策の指針のもと、大学が定めた新型コロナウィルス感染拡大防止のための行動指針に基づき、学生の大学構内立ち入りの禁止や授業や実習を一部オンラインに切り替えるなど感染状況に応じた対策をとってきた。また、感染が拡大する時期のサークル活動は中止となり、学生は大学内で他の学生や教員と交流する機会が減少する状況が続いた。COVID-19が大学生に及ぼした影響については、新しい友達との出会いや大学のイベント実施を諦めており、その不自由さにストレスを感じているといった報告がある[1)]。本学においては、黙食や休憩時間に学生同士で気ままに会話ができず、大学祭などのイベントも中止され、学生は様々な制限があるキャンパス生活を送ることになった。こうした行動制限は大学生のコミュニケーションに影響を与えることが指摘されている[2)]。看護師を目指す本学学生の人間関係を構築する能力に関して、少なからず影響していることが推察される。

本学ではディプロマ・ポリシー（卒業認定・学位授与に関する方針）として、「人間の尊厳と権利を擁護する力」、「自己教育力」、「チームで働く力」、「問題解決力」、「看護の専門性を探求する力」の５つの力を定めている。これらの力は、人と人との相互性を根幹として培われるものである。したがって、看護実践力において重視されるコミュニケーションやクリティカルシンキング、マネジメント能力[3)]を、実習や演習で身に付けるだけでなく、正課外教育を含めた日常生活における豊かな人間関係において醸成されると考える。看護大学における正課外教育は、自治会や学園祭、サークル、ボランティアなどが主流で、学生が正課外活動を経験すると社会人基礎力が高まることが報告されている[4)]。一方で、看護大学のカリキュラムは年間を通して講義や演習、実習が構成されているため、正課内・正課外教育を包括したカリキュラム全体の枠組みを検討することが課題とされる[5)]。また、看護大学の学生が楽しみながら学べるイベント形式の正課外教育について実践報

1）日本赤十字九州国際看護大学
2）令和健康科学大学看護学部

告されたものはみあたらない。

そこでCOVID-19の感染状況が継続するなか、感染対策を講じた正課外教育の一環として、学生がリフレッシュでき何かにチャレンジできる企画を検討したいと考えた。企画にあたり、行動制限に伴い特に影響をきたしているコミュニケーションやチームワークについて、これらの能力が発揮できる課題を準備し、学生が課題に取り組むことで楽しみながら学びの醸成と看護実践力が育成されるイベントにしたいと考えた。

上記の背景を踏まえ、本学の学長と中核メンバー4名で正課外教育となる「学長杯」を企画し、企画に賛同した教職員の協力を得て実施した。「学長杯」の実施目的は、1)COVID-19による影響で学生間の交流が薄くなった現状を踏まえ、大学生活をより豊かにするため学生同士の交流の機会とする、2)看護実践力を競い合う過程の中で、専門的な知識と技術の習得を促し、ピアチューターとの学び合いの機会を通して看護実践の奥深さと価値を涵養する、3)大学教育の発展に向け、教員間で教育方略を共有し、新たな価値ある教育を見出すための一助となるイベントとする、の3点であった。

本稿では、「学長杯」の実施と課題、また今後の展望について報告をし、看護大学における新たな正課外教育の可能性について検討する。

Ⅱ　「学長杯」の概要

「学長杯」とは、シチュエーション・ベースド・シミュレーション教育[6]の手法を用い、ラリー方式でミッションに臨むイベントである。ミッションとは参加した学生に提示する課題のことで、今回は1・2年生が実践可能なレベルとし、看護の知識・技術だけでなく、総合的な看護の実践力を求める内容、赤十字の特色を考慮したものとした。ミッションは複数準備して、参加学生がミッションに取り組む場面となるステーションに複数名の教職員を配置した。

開催日時は学生が正規の時間割を終えた学期末の2022年3月10日とした。開催方法はCOVID-19による影響を鑑み、web会議ツールZoomのブレイクアウトルームを用いることにした。各ステーションをブレイクアウトルームに分けて、当日はステーションの様子を撮影しZoomにて配信するようにした。1ステーションの制限時間は30分程度とし、すすめ方は、1）導入：各ステーションで取り組むミッションの提示、2）実践、3）フィードバック、4)次のステーションへの移動とした。各ステーションでは評価点（1ステーションにつき、100点満点）を算出し、最終的に総合計で第1位から3位までの表彰を行うことにした。評価項目は、「学長杯」の実施目的に沿って1）主体的に臨んだか、2）メンバー間の協調性があったか、3）ミッションの解決に向けて柔軟に対応できたかの視点を考慮して、各ステーションの特徴を踏まえ設定してもらうように担当者に依頼した。

学生はチーム単位でミッションに取り組むようにし、1チーム3名以上の複数メンバーでの参加を募集した。ピアチューターによる学びあいの機会になるようゼミやサークル単位など異学年チームでの参加を推奨した。また、「学長杯」の開催前にチーム内で役割分担や作戦会議を実施するなど準備を整えるように参加学生に呼びかけた。

また、学生主体の企画として、開催当日の昼休みの時間帯に赤十字に関するクイズを出題する全体イベントを実施することにした。学生主体の全体イベントは評価に含めなかった。

Ⅲ　「学長杯」開催までの準備

1．教職員の募集とミッションとステーションの準備

2021年12月の教職員会議において「学長杯」の実施目的・概要を説明し、企画に賛同してもらえる教職員を募集した。併せて、卒業を間近に控えた4年生に対し、当日ステーションにおいて患者・家族役を担える若しくは、撮影を担当してもらえるボランティアを募集した。

ミッションについて中核メンバーで案を作り、企画に賛同した教職員と相談をして具体化させシナリオを作成した。シナリオには、学生がミッションをクリアできるように具体的にどのように展開するのか、また評価の視点を明記するようにした。役割分担として、ミッションで役を演じる患者・家族・看護師、撮影者、評価者とした。ステーションはミッションの内容に応じて、大学内の実習室やラーニングコモンズなどの場所を設定し、学生が臨場感を感じられるようにした。2022年3月上旬に各ステーションでトライアルを実施し、学生がパソコンやスマートフォンの画面越しからミッションに取り組む

ことができるのか、ミッションを解決できる展開か、評価の視点が妥当であるのかを確認した。

２．参加する学生の募集と事前準備

本学のポータルサイトを用い、「学長杯」の実施目的・概要を明記し１年生～３年生を対象に参加者を募集した。募集はMicrosoft Formsを用いた。チーム毎に申し込みがあった場合は、同チームとし、１名単位の申し込みは該当学生に相談の上、チームを決定した。

「学長杯」開催１週間前に、優勝への手がかりとして、ミッションをクリアするために事前に準備しておくべき学習内容を提示した（図１）。

Ⅳ　倫理的配慮

倫理的配慮について、本稿の記述内容から「学長杯」の参加者の個人が特定されないように留意した。参加者および教職員に対し、開催当日の様子について写真撮影する旨、同意を得た。また、本稿に明示した写真は、参加者である学生は個人が特定されない後ろ向きのものを選び、写っている教職員には了承を得た。

Ⅴ「学長杯」の実施と課題

１．参加者の概要

参加者は、１年生20名、２年生３名、３年生12名の計35名であった。チームは８組とし、１チーム３～５名で学年別に設定した。各グループにチーム名および、チームリーダーを決めておくように周知した。

２．設定したミッションとステーション

企画に賛同した教員は22名、職員は５名、４年生のボランティアが８名であった。１ステーションに３～７名を配置し、ステーションは、「新人ナースを助けよう！～入院患者さんがCT検査に呼ばれたよ～」、「アサーティブなコミュニケーションで患者さん対応！」、「認知症をもつ高齢者への対応！～仕事に行ってくるよ～」、「新生児訪問！お母さんに分かりやすく伝えてね！（英語での対応）」、「バスガス爆発！傷病者あり！（トリアージ）」、「危険予知能力で患者の安全を守れ！」、「赤十字就職面接対応～己を出し切れ～」の７つを設定した。プログラムとして、８クールで時間を区切り、１クール28分での運営とした。チームは８組で、設置したステー

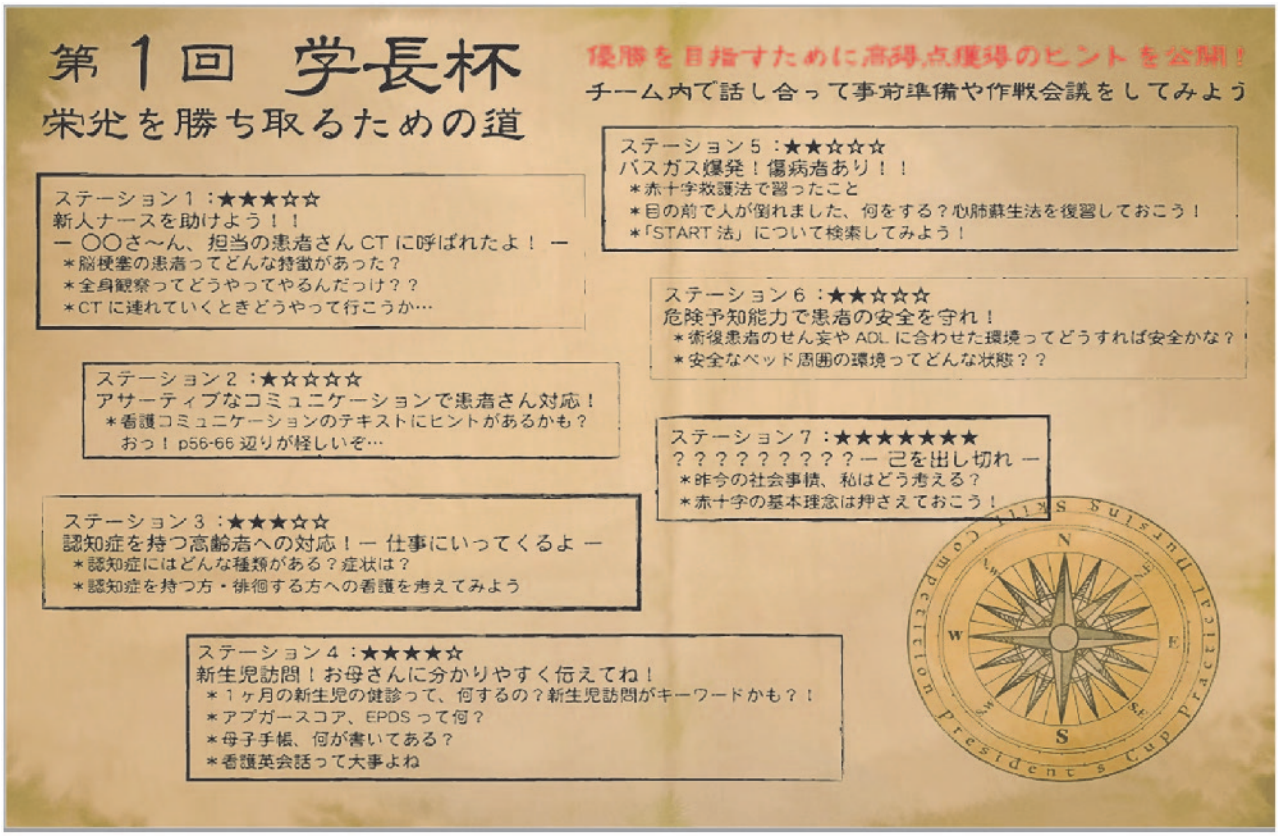

図1　ミッションクリアを目指し準備しておくべき学習内容

表1 「学長杯」のプログラム

クール				第1クール	第2クール	第3クール		第4クール	第5クール	第6クール				第7クール	第8クール		
時間設定	9：00～9：05	9：05～9：15		9：15～9：43	9：44～10：12	10：13～10：41	10：41～10：46	10：46～11：14	11：15～11：43	11：44～12：12	12：12～13：12	13：12～14：02	14：02～14：10	14：10～14：38	14：39～15：07	15：08～15：20	15：20～15：30
所要時間（分）	0：05	0：10		0：28	0：28	0：28	0：05	0：28	0：28	0：28	0：60	0：50	0：08	0：28	0：28	0：12	0：10
進行	開会式・学長挨拶	オリエンテーション・Zoom移動	チーム1	ステーション1	作戦タイム	ステーション7	休憩	ステーション6	ステーション5	ステーション4	昼休憩	全体イベント（赤十字テスト）	休憩	ステーション3		全体フィードバック	表彰式・学長総評・閉会式
			チーム2	ステーション2	ステーション1	作戦タイム		ステーション7	ステーション6	ステーション5				ステーション4	ステーション3		
			チーム3	ステーション3	ステーション2	ステーション1		作戦タイム	ステーション7	ステーション6				ステーション5	ステーション4		
			チーム4	ステーション4	ステーション3	ステーション2		ステーション1	作戦タイム	ステーション7				ステーション6	ステーション5		
			チーム5	ステーション5	ステーション4	ステーション3		ステーション2	ステーション1	作戦タイム				ステーション7	ステーション6		
			チーム6	ステーション6	ステーション5	ステーション4		ステーション3	ステーション2	ステーション1				作戦タイム	ステーション7		
			チーム7	ステーション7	ステーション6	ステーション5		ステーション4	ステーション3	ステーション2				ステーション1	作戦タイム		
			チーム8	作戦タイム	ステーション7	ステーション6		ステーション5	ステーション4	ステーション3				ステーション2	ステーション1		

ステーション１：新人ナースを助けよう！～入院患者さんがCT検査に呼ばれたよ～
ステーション２：アサーティブなコミュニケーションで患者さん対応！
ステーション３：認知症をもつ高齢者への対応！～仕事に行ってくるよ～
ステーション４：新生児訪問！お母さんに分かりやすく伝えてね！（英語での対応）
ステーション５：バスガス爆発！傷病者あり！（トリアージ）
ステーション６：危険予知能力で患者の安全を守れ！
ステーション７：赤十字就職面接対応～己を出し切れ～

ションは７つであるため、１クール作戦タイムを設定した（表1）。

すべてのクールが終了した後、各ステーションの評価ポイントを全体フィードバックする時間を設け、その後、表彰式と閉会式を行った。

３．開催当日の実際と参加者の反応（写真１）

当日は、中核メンバー２名が全体の司会進行とZoomのブレイクアウトルームの設定を担当した。ブレイクアウトルームは、学生チーム毎に分け、順次各ステーションの教員がブレイクアウトルームに移動するかたちをとった。学生には画面と音声をオンにしておくように伝え、発言が常時できるようにした。撮影者は､現場の臨場感が演出できるように、場面全体と登場する患者、家族の表情や反応について、学生が捉えることができるようにカメラワークを工夫した。

「学長杯」の冒頭、参加者全員が集まり、開会式、オリエンテーションを実施した。開会式では、参加した学生がチーム対抗の競技戦であることを意識しモチベーションが向上するように工夫した。オリエンテーションでは、当日の流れと「学長杯」のルールとして、１ステーションごとの制限時間や、作成会議の時間があること、チームメンバー間で協力してミッションに取り組むことについて説明をした。

ステーション１「新人ナースを助けよう！～入院患者さんがCT検査に呼ばれたよ～」では、参加者の学生が先輩看護師となって、脳梗塞で片麻痺と構音障害がある患者を新人看護師が安全・安楽にCT検査に搬送するための準備から実践できるように誘導し支援するミッションであった。対応のポイントは、患者が移動できる状態にあるのか、麻痺を踏まえ安全に車椅子に移動する方法を助言ができるかであった。ステーション２「アサーティブなコミュニケーションで患者さん対応！」は、学生は３年目の看護師の設定で、先輩看護師から送別会の幹事を依頼されたが、業務過多で辞退したいと考えており、アサーティブなコミュニケーションで先輩看護師の依頼を断るミッションであった｡対応のポイントは、自分の状況を伝えることができるのか、先輩看護師が納得できる提案ができるかであった。ステーション３「認知症をもつ高齢者への対応！～仕事に行ってくるよ～」では、学生は訪問看護ステーションの看護師の設定で、アルツハイマー型認知症の利用者宅へ訪問した際､「仕事に行く」と自宅を出ていこうとする状況への対応で、利用者の尊厳を保ち、安全を確保するミッションであった。対応のポイントは、外出（徘徊）を無理に引き止めず、利用者の話を傾聴し理由を確認できる、転倒を防止できることであった。ステーション４「新生児訪問！お母さんに分かりやすく伝えてね！（英語での対応）」は、学生は新生児訪問を行う保健師で、母国語が英語である母親と生後１か月の女児への対応がミッションであった。対応のポイントは、母親の不安を緩和する関わりをもったか、女児の身体状態を観察しアセスメントできたかであった。ステーション５「バスガス爆発！傷病者あり！（トリアージ）」は、大学の玄関前でバスが爆発し、これに遭遇した学生という設定で、複数の傷病者に対するトリアージができるというミッションであった。対応のポイントは、START法を用いた適切なトリアージができる、適切な応急処置の指示ができるであった。ステーション６「危険予知能力で患者の安全を守れ！」は、臨地実習初日という設定で、学生がグループで受け持つ４人部屋の患者が安全かつ安心して生活できる環境を保持するミッションであった。対応のポイントは、４名の患者の様々な危険な状況に気が付き、適切な環境整備の指示ができるかであった。ステーション７「赤十字就職面接対応～己を出し切れ～」は、仮想の「宗像赤十字病院」を想定し、学生が採用試験の面接を受けるという設定で、自らの考えを適切に発言できるというミッションであった。対応のポイントは、基本的な礼節、自らのキャリア形成・赤十字で学ぶ看護観を言語化できることであった。

写真1　「学長杯」当日の様子

ステーションでのミッションが始まると、最初は各チームどの学生も緊張した様子があり、画面越しにどのように発言したらよいのか悩む様子があった。患者・看護師役を演じる教員は、学生が発言できるように適宜、誘導をして、ミッションクリアに向けた展開になるようにした。徐々に、学生は画面

越しに提示されたミッションについて、チーム一丸になって解決に向けて話し合い、担当教員に追加情報の提示を求めるなどの反応をとるようになった。1年生の参加者は、カリキュラム上学んでいない知識について、事前に提示された学習内容をもとに対策をとっており、果敢にミッションに臨み、チームワークを発揮していた。

各回、ミッション後にステーション担当の教員は実践状況について学生と一緒に振り返り、できていたところを強調したポジティブフィードバックを行った。

4．課題

今回の「学長杯」の準備から実施における運営上の課題として、以下の2点が考えられた。1つ目は、ミッションの提示後、チーム内でどのように対処するのかを話し合う時間を設けた方がよかったことである。「学長杯」開催1週間前に事前学習の内容を示したが、ミッションの具体的な内容は当日提示したため、一部のチームは戸惑い無言のまま時間が経過する状況が見受けられた。今回オンラインによる実施であり、学生同士声を掛け合うことは難しさがあったこと、教員側も初めての運営で余裕をもった進行に慣れておらず、ミッション中に作戦会議の時間をもつよう促すことが十分にとれなかったと考える。2つ目の課題は、オンラインおよび撮影に伴う問題で、役を演じた教員の声の聞きとりにくさがあったこと、場面の状況について参加者自ら確認したい視点や環境全体を捉えるには限界があった。撮影では、参加者が臨場感をもって場面の情報を捉えられるよう工夫をしたが、2次元の1つの画面上では視覚的な情報収集に課題があったといえる。ミッション中に参加者に確認したい場面はないか、適宜確認をとるなどの対策をとる必要がある。また、ミッション中、参加者は画面越しにどのタイミングで発言してよいのか、発言が同チームの学生と重なることもあり、躊躇う様子があった。事前にデモンストレーションを兼ねた複数回のトライアルを実施し、参加者の発言が重複した場合など様々な想定を予測して対策を講じておく必要がある。

正課外教育として実施した「学長杯」の課題として、以下の2点が考えられた。1つ目は、学生のチーム構成を同学年にしたため、ピアチューターとしての学び合う機会に限界があったことである。今回は互いに面識があり、少なからず関係性を構築していると想定されたゼミやサークルなどを主体としたチームでの参加を推奨した。オンラインによる実施であり、面識のない学生間ではメンバーシップが十分に発揮されないことが推測されたため、チーム構成に関して企画者から意図的なかかわりは行わず、学生の意向を尊重することにした。結果として、同学年の学生チーム構成となり、限られた学生間の交流に留まったといえる。今後、学年を超えた学生間の交流ができるようにチームを構成するなど企画を検討したい。2つ目の課題が、今回「学長杯」に参加した学生は、複数のミッションに挑戦をしたが、いずれも正課外活動について経験をしたレベルに留まったことである。正課外活動において単なる経験に留まらず学生の社会性が培われることが重要であるため[7]、本学が独自に取り組むeポートフォリオである「将来の夢･目標」やディプロマ･ルーブリック評価、ディプロマ・サプリメントに実践したことを成長の記録として残し、日々の学修に還元できる仕組みをつくることが必要である。正課外のキャリア教育の体系化を目指した取り組みについて他大学の取り組みとしてすでに報告されており[8]、正課外教育の一環として単独での「学長杯」を企画するのではなく、正課内教育を連動させ看護実践力育成やキャリア形成を目指した教育システムの構築について検討が必要である。

Ⅵ　今後の展望

本稿では、学びの醸成と看護実践力育成を目指した正課外活動の1つの取り組みである「学長杯」の実際と課題を報告した。総合考察として、今後の「学長杯」の展望と看護大学における正課外教育の可能性の2点を以下に論じたい。

1．今後の「学長杯」の展望

今回、英語による対応や自分の考えを言語化するなど多彩なミッションを準備した。参加した学生は状況を的確に捉える力、捉えた状況を分析し何が必要かを判断する力、柔軟に対応する力、チームで協働し課題を解決する力、対象者の特性に応じてコミュニケーションする力を発揮したといえる。これらは看護実践において必要となる能力といえ、今回の「学長杯」は看護実践力育成に向けた取り組みであったと評価する。また、本学の5つのディプロマ･

ポリシーの「人間の尊厳と権利を擁護する力」、「自己教育力」、「チームで働く力」、「問題解決力」、「看護の専門性を探求する力」にも当てはまり、今回の経験によって学生はディプロマ・ポリシーの力を実践するとともに、自己の強みや課題を客観的に見つめる機会を得たと考える。今回の「学長杯」のような正課外教育において、学生が客観的に自己を見つめる機会をもつことは、学修に限らず、日頃の生活で課題を克服することを意識する機会になり、課題克服に向けた行動の強化が期待できると考える。また、学修に限らず、リーダーシップや柔軟に対応する力など、学修面以外の強みに学生が気付いていない場合、今回の「学長杯」といった正課外教育を通して、学生は認識できることが期待できる。自己の強みや課題を客観的に捉えられることは、学生のキャリア形成を考えるうえで重要だと考える。

今回の「学長杯」の１つの特徴に、学生がチームで協働してミッションのクリアを目指すことがあった。対面で直接的にチーム内において協働することはできなかったが、事前に準備しておくべき学修内容を提示したため、学生間で話し合いをもち相互に学ぶ機会をもったと考える。看護実践力において、社会的スキルやチームワークは重要で、学生にとって豊かな対人関係の経験は重要視されている[9)]。正課内教育において演習や実習で、これらは培われているが、正課外教育において相互的学修の機会を得ることで、より強化されると考える。今回の「学長杯」の課題の１つに、異学年の学生間の交流や学び合う機会が十分でなかったことが挙げられた。本学を含めた看護大学においては、通常、学年を超えた学生間の交流はサークル活動など機会が限定されている。「学長杯」における学年を超えた学生間の交流はピアチューター[10)]の効果を期待できる。低学年の学生は自分の数年後の姿をイメージでき、高学年の学生は自己の成長を自覚できる機会となる。また、ミッションを通し、学生は自発的に教え合う行程をもつため、知識や看護技術を定着する機会になると考える。

今回は感染状況を踏まえオンラインによる実施であったが、今後、対面で実施できることを検討していきたい。また、企画にあたり、教職員に限らず、実習施設の看護師に参画してもらうことや赤十字の組織力を生かしたミッションの設定などの計画が検討できる。実習施設の看護師が「学長杯」に参画することで、大学と実習施設との連携を強化できることや看護師が大学内の学生の様子を捉える機会になり、実習指導に役立てられる効果が期待できる。

２．看護大学における正課外教育の可能性

今回の「学長杯」の取り組みは、定期試験など紙面上では推し量れない学生の判断することや柔軟に対応するといった潜在能力を引き出す新たな試みであったといえる。看護大学のカリキュラムは、講義に加え臨地実習、定期試験と通年かけて非常に過密であるといえる。そうしたなかで、正課外教育として、楽しみながら学ぶ機会を設けることは学生の主体性を育む意味で大きな意味をもつと考える。さらに、私立大学において自校教育は愛校心を育成するうえで重要であり、本学も重点事業として取り組んでいる。学長杯を通して、自らが学ぶ大学に愛着を持ち愛校心を育むことは、大学全体に大きな影響を与え、学生並びに教職員の活性化につながり、ひいては大学の発展に寄与できるものと考える。

今回「学長杯」に参加した学生が学ぶ楽しさや達成感について、今回参加を見合わせた学生に伝達していくと正課外教育に対する興味が波及していく効果も期待できる。

また、企画に賛同しミッションを担当した教職員においては、教員間で教育方法について共有ができ、授業や演習計画の参考にできる機会になった。更に、学修以外に懸命に取り組む学生の姿を目の当たりにできたことも大きな意味をもったと考える。

今後、正課外教育の効果を検証することは課題といえるが、「学長杯」を継続して長期的に評価していくことが、必要であると考える。今後の可能性に期待をしたい。

Ⅶ　結論

「学長杯」の実施によって、参加した学生は提示されたミッションを解決すべく、チームで協働するなかで学生同士が交流する機会になった。また、7つの多彩なミッションを準備したことで、学生は学び合う機会を得ながら看護実践力を競い合い、事前準備から当日の実施に至る過程で専門的な知識と技術の習得に繋がった。引き続き正課外教育の一つ試みとして、「学長杯」の実施を継続し、効果について長期的に評価をし、正課内教育と連動させた新たな大学教育の発展に向けた検討が必要である。

謝辞

「学長杯」の運営に協力をして下さいました学生、教職員の皆さま、また参加して下さった学生の皆さまに感謝申し上げます。

文献

1）石川悦子：コロナ禍における大学生の学生生活に対する不安感とストレス．こども教育宝仙大学紀要，13：13-20，2022.
2）李敏子:長期化するコロナ禍における学生支援．椙山女学園大学学生相談室活動報告，16：3-9，2021.
3）松谷美和子，三浦友里子，平林優子，他：看護実践能力：概念，構造，および評価．聖路加看護学会誌，14(2)：18-28，2010.
4）石川美智子，板倉朋世，松本明美：看護大学に在籍する学生の課外活動と社会人基礎力との関連性．獨協医科大学看護学部紀要，7：11-21，2013.
5）近藤麻理:カリキュラム「外」の活動をカリキュラムと結びつけるために．看護教育，57(3)：174-178，2016.
6）阿部幸恵:シミュレーション教育の構造と理論．阿部幸恵編：看護のためのシミュレーション教育：臨床実践力を育てる！．61-63，東京，医学書院，2013.
7）辻多聞：大学生および大学における正課外活動の位置付け．大学教育，16：17-24，2019.
8）中村伸枝，谷本真理子，坂上明子，他：看護学部におけるキャリア教育の体系化とキャリアポートフォリオの導入．千葉大学大学院看護学研究科紀要，35：21-24，2013.
9）北島洋子，細田泰子，星和美：看護系大学生の社会人基礎力と看護実践力および日常生活経験の関係．日本看護学教育学会誌，22(1)：1-11，2012.
10）石毛弓：学習支援におけるピアチューターの存在意義．リメディアル教育，9(2)：40-46，2014.

Report

Implementation of "President's Cup" to foster learning and develop practical nursing skills: Examining the possibility of new extracurricular education in nursing colleges

Koji Yamamoto[1)] Yuki Sonoda[2)] Ryohei Kimura[1)] Ayako Fukushima[1)] Hiroko Komatsu[1)]

In March 2021, the "President's Cup" was held as a part of extracurricular education to deepen the interaction among students, foster learning, and develop practical nursing skills amid the activity restrictions associated with infection control measures due to the coronavirus disease-2019 pandemic. This paper reports on the "President's Cup" implementation, its challenges, and prospects, and discusses the possibility of new extracurricular education at nursing colleges. The "President's Cup" was conducted online from the viewpoint of infection control, and seven missions were prepared to seek comprehensive practical nursing skills. The participating students were first-year to third-year students, and the program was structured for them to work on the missions in teams and solve the missions, utilizing the provided preparatory study in advance. The students worked on multiple missions and demonstrated their ability to communicate with the target population according to their characteristics, which is necessary for practical nursing skills and their ability to accurately perceive situations, make judgments, and flexibly respond. We will continue the "President's Cup" and evaluate its effectiveness as an extracurricular education, and consider educational system construction that aims to foster practical nursing skills and career development by linking it to regular education. "In addition, it is essential to consider implementing the "President's Cup" in person and the participation of nurses from practical training facilities and planning in order to effectively utilize the organizational strength of the Red Cross.

Key words: President's Cup, nursing college, extracurricular education, nursing skill

1) Japanese Red Cross Kyushu International College of Nursing
2) Reiwa Health Sciences University